優　良　賞

「日々を愛おしむこと」

智辯学園中学校　３年　松浦　衣真

私の家は父、母、私、妹の四人家族です。だからなんだと思われるかもしれませんが、こうして家族全員を紹介できる事は幸せこの上ないことだということ、そして、へんぺいに過ぎていく日々は当たり前ではないということを私は痛感させられました。

去年の夏、母が乳がんだということがわかり手術をしました。発見が早かったので手術をすれば良くなると母は言っていましたが、私は不安、心配、恐怖でいたたまれない気持ちでした。初めの頃、母は私と妹には秘密で病院に通っていたようです。私たちには出張だとか会議だとか嘘をついていました。しかし、私は母が叔父と電話で病気のことを話しているのを偶然聞いてしまい、妹よりも先に母ががんになったことを知りました。ステージ、セイケン、ショキ・・・・・・聞いたことはあったけれどよく分かりませんでした。しかし、がんに関連することだということは分かりました。なぜ自分の母が・・・・・・という思いで胸が締めつけられました。けれど、私は、どうしていいか分からず、母の病気を知ってしまったことを誰にも言えませんでした。私や妹に言えないほどの重症なのだろうか。母が死んでしまうのではないか。そういう不安で頭がいっぱいになり。一日中、気になって仕方がなかったことを鮮明に覚えています。

母が手術で入院している時、家では父と妹と私の三人になり、家事の仕方が全く分からず、母の偉大さを身にしみて感じました。洗濯は一日一回では追いつかないこと、どのゴミをどの曜日に出すのか考えていなかったこと、お弁当を作るのにはこんなに早起きしなければならないこと、母の作るお弁当が、いつも栄養のバランスが良く、彩りも良かったこと、コンビニのお弁当は続けていると飽きてしまうことなど毎日の暮らしの中には気づいていないことがたくさんあったのだと痛感させられました。そして、その全てに母の愛情があり、それに包まれて私は生きているのだと思いました。だからもっと感謝の気持ちを持たなければならないし、お手伝いもしなければならないと思いました。

手術の直前、病院にお見舞いに行った時、ベッドで横になっている母は、看護師さんといつも通りの優しい笑顔で話をしていました。今から手術で怖いはずなのに、こんな時でも前向きで強い母を素直にすごいと思いました。無事、手術は成功し、母は元気になりました。母は今でも病院に通っていますが、普段はそのことを忘れてしまうほどです。私自身も今では、母が通院した時に改めて、母は病気を患っていたんだ、手術したんだとはっとさせられる時があります。そのような時は、母が戻ってきてからは、何か母の助けになるようなことをしなければならないと分かっていながら何もできない自分や、以前のように甘えてしまう自分を心の中で叱っています。

一緒にお出かけをしたり、学校での面白かった話をしたり、嫌だったことを相談したりできるということは当たり前のように思っていたけれど、決してそうではなく、とても特別なことなのだということを闘病する母の姿を通して強く実感しました。

「明日またその人と会える事は当たり前だと思ってはいけない。」

いつか誰かが言っていたことを思い出しました。多くの人が忘れがちだけれど、今日一日を生きられたこと、今を安全に過ごせていること、自分、友達、家族が健康なことに感謝するべきだと考えます。この限りある命を全うできるように生き、母のように前向きで周りを支えられる強い人に私はなっていきたいです。